

里地通信 8月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋YKビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://www.geic.or.jp/sato/

連載：幹事紹介 いい町をつくる

齋藤 宏一(さいとう こういち)

愛知県美浜町長

「いい町をつくる」これが町長としての仕事であり、目的である。では、どんな町を「いい町」というのか？

「いい町」については人、それぞれの考えがある。

私は「いい町」の条件を4つの切り口から考えてみた。

1. 自然環境がよい
2. 経済的に豊か
3. 文化的な豊かさ
4. 安全な町である

1. 自然環境がよい所と経済的に豊かなところとは残念ながら反比例しているのがこれまでの例である。

人類はこれまで経済的な豊かさを追求してきて、今大きな過去のつけを突きつけられているのが環境問題である。「何とか環境を汚さない発展はないだろうか？」

2. 経済的な豊かさは、これまで人類が求め続けてきたテーマであり、際限なく続けられるであろう。

しかし今日では大きな規制の中での(環境保全という)開発が求められてきた。

3. 人生で生きる喜びを味わうことのできるのは、文化であり芸術であり、宗教である。つまり、心の教育であると思う。人づくりこそすべての根本である。

4. 治安がよく災害に対する備えがあつていい町といえる。

わが町美浜町を4つの条件の備わった町に近づけた

い。21世紀に望まれる、ふるさとづくりをわが町をあげて研究の場としたいと思っている。

これが「ふるさと研究むら」構想である。

つまり「自然と共生の町」プラス「心」を基本として「心の豊かさを味わえる町」「ふるさとの文化に接することのできる町」「野山を駆け野草、野鳥と語り合える町」「史跡、遺跡の多い町」「先端的産業研究の町」「健康と生涯教育の町」である。

以上が名古屋市から45分にある農村として、海・山林・川・池・農地・文化・史跡等に恵まれた、特性を生かし都市と農村の交流により、互いに求めあう物を守り育てることが地方の時代といわれる21世紀の町づくりであると思っている。

これまでの取り組み

ゴミ・家畜の糞尿のリサイクルへの取り組み
太陽光・ソーラー風力発電への取り組みと導入
里山事業への取り組み
国際交流、アメリカ・シンガポールとの草の根交流
にっぽん音吉トライアスロン in 知多美浜の開催(本年第7回)

きれいな町づくり条例の制定(H9.9施行)

経歴：

昭和32年、県立米田農業高等学校卒業と同時に自営
昭和50年 美浜町農業協同組合理事
昭和62年 美浜町議会議員
現役職 美浜町長、日本農業経営者連盟副会長、21世紀村づくり塾理事、三河知多山頭火の会事務局長

著書：「百姓の見たソ連」昭和57年不二出版

里地セミナー報告

パーマカルチャーとエコビレッジ

講師：系長浩司（パーマカルチャー・センター・ジャパン 代表
日本大学生物資源科学部 助教授）

農村住民の人たちと一緒に村づくりを20年くらい進めてきている。その中で多くのことを住民から学びつつも、農村での環境整備の価値観は、依然として都市に追いつこうと意識が強いことを感じてきた。最近ではやっと、地域にある地元の資源を生かし、それを活用して次世代に残すことを伝えようとする動きを起こしつつあるが、まだまだ、農村の重い扉はなかなか開こうとしない。明治期以降、かつ戦後一貫として進められてきた近代化意識、都市化意識は、簡単に意識変革ができるものではない。

しかし、地球環境時代の中で、やっと環境との共生や持続的で地域循環型・自立型の地域づくりに対する考え方や、その実践が起こりつつある。そんな時代的背景の中で、パーマカルチャーの考え方や具体的なデザイン論に出会い、農学、建築学、生態学、社会学、経済学等の細分化された近代的な学問と、技術をインテグレートしているものとして直感した。統合化・総合化の理論が求められている。総合的な地域デザインとしての体系としての魅力を感じた。統合化のドグマに陥ることなく、具体的な現実を変革していくオルタナティブな理論として活用していけることに魅力を感じる。現実の都市や農村での持続的で自立・循環系の空間としてどう再生させるかである。

パーマカルチャーは生活をしていく上での持続性を生活者がどうデザインし、創っていくのが基本である。近代化は、元々統合的であった生活が機能分化しているために多様な問題を引き起こしてきた。パーマカルチャーは、それをもう一回個々の生活の場、居住地の場で見つめ直し、再構築のための術を提示している。そんなことを感じている有志が集まり、2年前に日本での実践と情報交換・提供の拠点としてパーマカルチ

ャー・センター・ジャパンを神奈川県藤野町の山村集落内に立ち上げた。

パーマカルチャーの発展

オーストラリアのビル・モルソンが総合的な体系を創り、実践は世界的に行われている。一方では、後進国での自立的な村づくりを支援する活動もある。これは、パーマカルチャーについての講義を現場で住民にし、現地での調査、観察を行い、実際に現地で学んだ人々がデザインしている。

パーマカルチャーとは何か？

「パーマメント（永続性）・アグリカルチャー（農業）＝永続農業」、「パーマメント・カルチャー（文化）＝永続文化」であり、持続的農業を基本として、持続する循環型社会の構築のためのデザイン体系である。最初は、農業の持続性を生態系と共生しながら確保していくかの問題意識で始まっている。ビルの住むオーストラリアはアボリジニがすんでいて豊かな生態系があったが、ヨーロッパ人の近代農業の導入によって生態系を壊し、土壌流失、砂漠化してしまった。持続できる農業は、地域にもう一度戻し、かつ豊かな大地、土も作っていかなければならない。日本では江戸期での農村集落、農業の持続的な展開の術に近いものがある。

戦前、単一近代農業に疑問を抱いていたアメリカの土壌学者のキング博士がアジアの農業視察をした時、日本や中国の下肥農業での循環型農業において土壌が豊かなのを見て、パーマメントアグリカルチャーという言葉は用いていた。これははじめ日本で「停滞農業」と訳されたため、近代化＝進歩発展を価値とする経済の急発展の中で、この言葉は無視された。しかし、考え方によっては停滞とはなかなかできることではない。ある恒常の状態を維持するということと考えれば、非常に大変なことである。

自分達の身近な空間における衣食住など基本的な要求を身近なところで賄えるような環境を作るトータルなデザインが必要となる。「今までの生活の知恵」「地形や気象が持っている特質」「地域内における人々のつながり」「環境に負荷のない新しい科学技術」等を駆使した統合的デザイン。これらのデザインソースをベースとして、全体のデザイン体系を考えていく。

農業では化学肥料や農薬を使用せず、基本的には不耕起でも有用食物を収穫できる。森林はほっといても大きくなる。そういうエコシステムを生活のデザイン体系の中に取り入れることで、耕さなくても収穫はできるのではないかな？

ビル・モルソンによる 倫理と原則

「ガイアとしての地球に配慮をしよう」...地球に何かを返す、何らかの配慮をする。

「人間に対する配慮」...人間社会の在り方を考えよう。

「余剰物の分配」...余った物や労力は地域社会や次世代に公平に分配する。近代農業や近代的地域計画における倫理は何であったのだろうか。このようなことはまったく配慮されていない。「近代農業の倫理は生産性を上げること」「資本主義の倫理は投資したものに対して最大限の収益がかえってくること」

現代は、資本主義の中での持続性や循環などのキーワードが出てきているが、もう一つの社会・経済体系のあり方（協同的社会・経済）を可能とするような倫理感が必要となっている。しかし、これはまだ地球全体では共有しあっていない。

パーマカルチャーの原則

近代的なものはフロー型である。ある生産、都市生活をするためにあるものをインプットしてそれを使ったらそのままアウトプットするだけ。それに対してパーマカルチャーはAにとってはアウトプットであるものがBにとってはインプットとなる。さらにBからアウトプットされたものはCにインプットされる。こういうサイクル型の連携を創っていく。

こういうことで農業、経済、社会のシステムが成立つのが基本。

・つながりのある配置

例)

鶏に必要なもの(インプット)...餌、水、空気、土。
一方で鶏が出すもの(アウトプット)=生産するもの...卵、肉、糞、熱。

鶏の特性...地面を引っかく。虫を採る。土を耕す。

近代は、「生産」部分しか考えていなかったが、このインとアウトと特性を活かしたつながりのある配置をすることで、鶏を中心とした統合的なシステムができる。畑をすることと養鶏をすること、それを同時にできる。さらに、鶏の糞はハウスに落ち、ハウスからの有機物は養魚地に落ち、鶏の出すエネルギーは熱源となり、野菜生産のエネルギーとなる。これらの結び付け方は各要素の観察、分析が必要。それぞれの要素の特性を上手く利用し、結び付けることによって比較的無理なく全体のシステムが動く様になる。

自分達の生活の場で使える要素は何で、それをどう上手く組み合わせれば全体の完結したシステムができるかを考える。

・多機能性

ここで言う多機能は、ひとつのものに関して少なくとも3つは機能を持たせること。例えば、屋敷林の役割は、防風林、目隠し、用材、椎茸、土壌の流失を防ぐ、湿気を取る、他にもたくさんある。ところが、近代的農村は防風林としてからしか見ていない。ひとつのものを見る時にいろんな機能を果たしているということをおぼえている。ひとつのものはいろんな役割を持っているという理解をすることからはじめたい。

また、地域の持っていた伝統的な知恵も現代的に解釈して、近代的に取り入れることもある。

・多くの要素による重要機能の維持

重要な機能を果たすものを多面的に支援をし、供給していく。農村では、水は山や川や湧き水などたくさんの供給源を持っていた。しかし水道が発達してくるとそれに頼ってしまう。今度は元々どこから水をひいてきたかわからなくなったり、水源である森の手入れがおろそかになってしまう。

これは非常に重要な機能を果たすものの信頼を自分達で創っていくことをせず、他者に任せてしまうことで、非常に脆弱な構造である。神戸の地震がそれを示した。

・区域、区分そして高度のプランニング

【ゾーニング】

人間の家を中心にして考え、その周りに比較的1年生の草本の野菜等頻繁に利用する物を育てる。その周りには家禽など1ゾーンよりは使わないもの...等の人間労働の頻度を考えた層的配置。最終的な外部ゾーンには自然保護区のようなものがあり、人間が働きやすく、自然生態系と共生した環境の組み合わせによって生活空間の全域をデザインする。

【セクター】

方位...南側に日光を必要とするものを置く。北側には防風林を置く。

重力...上から飲み水として一回使った後にそれが水洗トイレで使われ、次に植物浄化が成される湿地帯に流す。水が高いところから低いところに流れる性質を利用し、貯め、使用し、貯め、使用する。

・エネルギーの再循環

今までは果樹園でできた果実が町で売られ、私たちの排出物はゴミとなり川などに排出してしまうという一方的な流れであったが、そうではなく、排出物を家畜の餌にしたり堆肥にしたり、循環系のデザイン構築が考えられる。(国連大学のゼロエミッション・長井市のレインボープラン)情報の循環も同様である。

【自然遷移】

森ができていく過程を考えると、最初は何もない状態から段々バイオマスが増えていきクライマックス(極相)に到達し、そこで安定する。しかし、実際には自然環境の制御によりバイオマスは減少、また増加をしこの波を繰り返す。パーマカルチャーはこのエコシステムの遷移のプロセスを農業や環境づくり中に取り入れてデザインすることを考える。人間があえて力を加えなくともバイオマスは増えていく。問題はそのバイオマスが人間にとって有用であるかどうかである。

農業はクライマックスに上がろうとしているものを止める(=環境管理)。止めるから労力もお金もかかる。例えばその棚田を残そうとしたらそのための労力もお金もかかる。その棚田は、森林に、里山に遷移していく過程方向もひとつの自然の方向として考えていく。最終的なクライマックスだけと極層に至ると人間居住にとって、不的確な環境となる場合もある。ただ、1年草~極層までの多様な生態系の遷移形態を持つこ

とが、豊かな自然とそこからの恵みを獲得することができるし、恒常的で人間にとっても有用な環境となる。多様で有用な生態系の創造に向かって、農業も、林業も、水産業も組み合わせるのがパーマカルチャーのデザインである。東南アジア等でのアグリファーレストや、ベトナムでの果樹園と養豚と養殖を相互関連化させた複合システムとしてのVACシステム等の伝統的なデザインにも見てとれる。日本の里山空間もある程度はこのエコシステムを意識して維持されてきた。

そこには1年草のものと極相に向かう極相林的なものを植えることにより混合的なものを造る。水田もやるけれどその畦に果樹や豆科のものなどを植える。そうすることにより、ある時その場所が森になってしまってもいい。ある場所そのまま水田であってもいい。もう少し複合的に自然が遷移していく中で考えれば楽になるしその方が自然生態系と共生できる。

江戸時代は循環的農業の側面をもつ一方で、都市を中心とした米市場を構築しており、東北では、無理処理、農民に換金作物である米を地方の雑穀の代わりに作らせた。これは飢饉や冷害がきたらやられてしまう。雑穀など、地域に合った多様なものを作っていればこのようなことにならなかった。モノカルチャーで自分達の生活が成立させる様なシステムを権力者が市場経済をベースとして確立させた。それは日本だけではない。

ひとつの例として、アジア諸国におけるグリーンレボリューションの課題がある。稲の品種改良とそれに基づく大規模な灌漑整備と、化学肥料と農薬の使用による水稲単作の奨励により、米の収量そのものが飛躍的に向上したが、農業のモノカルチャー化による農村・農業環境の脆弱性を露呈し、農民自身は自立した経済体とはならず、商業資本に依存する弱い存在となった。地域の特質を活かした複合農業のあり方が模索されている。「多様な食べられる生態系を自分達の周りに作っていこう」という複合農業が最近の動きがある。

今年の3月にオーストラリアのパーマカルチャーインスティテュートに同行した福岡の古野さんのアイガモ同時水稲作は、米作りもするし、アイガモの肉も作るし、合鴨の餌として水田の雑草だけでなく、空中チツソを固定するアゾラも育てる。水田の中では魚もドジョウもいる。彼いわく、畜産業も、養殖も、農業もやっている。かつ窒素固定もやっている。稲は干して有機肥料にもなる。

農業は生態系の遷移をあるところで、無理矢理止めてきた。特に近代的農法は、それを単一で極端に止めている。その結果として、農業生態系も非常に単純なものになっている。単純なものは、危機的状況に対して弱いものとなる。このような農法ではなく、できるだけ自然生態系の遷移の過程を取り入れた複合的で、混合的な食べられる生態系のシステムを構築していくのが、パーマカルチャーである。ビル・モリソンとの会話の中で、「オーストラリアに食べられるジャングルを作っていくこと」を目指しているという言葉は印象的である。

これ以外にパーマカルチャーのデザイン原則には、適正技術や、多様性、エッジを最大限にする等があるが、時間の関係で省略する。

パーマカルチャーの目指すものに、自立し循環した地域コミュニティの基本単位として、「エコビレッジ」と、バイオリージョンがある。パーマカルチャーの原則で創造されたエコビレッジがオーストラリアにあ

る。また、世界的に多くのエコビレッジが形成されつつあるが、それらのネットワークは、グローバル・エコビレッジ・ネットワークとして形成されている。中でも、デンマークにおけるエコビレッジ・ムーブメントには学ぶべき点が多くある。これらの詳細について、スライドを使って説明した。詳細は、参考図書を見てほしい。

また、8月28日～9月7日まで、デンマークのエコビレッジと英国のエコビレッジの視察旅行を計画している。希望者は、パーマカルチャー・センター・ジャパンまで連絡してほしい。連絡先は、0426-89-2088、事務局長 設楽清和まで。

参考図書

『パーマカルチャー 農的暮らしの永久デザイン』
ビル・モリソン、レニー・ミア・スレイ著 農文協

『BIOCITY』No. 9、No.13、バイオシティ

里地セミナー報告 グラウンドワーク

講師：千賀裕太郎（東京農工大学 農学部
地域生態システム学科教授）

日時：6月20日（土）10:00～13:00

グラウンドワークとは

地域を構成する「住民」「行政」「企業」の3者がパートナーシップを組み、グラウンド（生活の現場）に関するワーク（創造活動）を行うことにより、生活の最も基本的な要素である自然環境や地域社会を整備・改善していく活動です。従来のような行政のトップダウン的な地域計画ではなく、住民と企業を加えたしっかりした3者の協力システムによって、土地、資金、アイデアをだし、汗を流し実行するものです。理想的なスタイルとしては、3者からの代表があつまる「グラウンドワークトラスト」を結成し、専門家たちも加え、地域の環境保全活動を展開することが望まれています。

企業、行政は、資金、人材、土地を供出し、住民が、慈善的なボランティア活動により労力を提供することで、地域の環境を維持推進していくこと。このためには、専門能力のあるスタッフがいる事務所が必要です。環境デザイン、造園、社会教育、環境教育などの専門能力をもったスタッフと、特に、3者のコーディネーターとなる人材の確保が必要です。どのように専門スタッフを確保するかが最も重要です。グラウンドワーク運動は、地域コミュニティの活性化、個々の地域主体の能力を高めます。

グラウンドワーク運動の発祥は

イギリスの農村で1980年代にはじまり、全国組織としてのグラウンドワーク事業団が、環境庁、組織や民間団体、ECなどと関係を取りながら、地域の活動を支援していきます。

地域では、現在42地区でグラウンドワークトラスト

が運営され、常勤スタッフ数500、事業数3500、事業収入2000万ポンドになっています。

運営資金は、国と自治体が80%のコアコストを拠出し、残り20%相当の財貨や労働などを、企業及び住民が負担します。行政からの支出の割合を段々下げていって公的資金から私的資金に代えていくことで独立した運営ができるようにしていっています。現在は、50%くらいの公的資金の拠出という段階に来ています。英国人口の17%が何らかの活動に参加しています。

グラウンドワークトラストの法的な性格は

自由な活動を可能とする有限責任会社としての性格と、公益的な位置づけを与えられるチャリティー資格を保有していることが特徴です。補助金や社会的な信頼を得られることで、地域のボランティア活動を行う上で非常に活動しやすい組織になっています。日本でも、NPO法案による社会的な信用が期待されています。

英国グラウンドワーク運動の背景

日本は大きな政府であり行政主導型ですが、英国は小さな政府を目指した国です。

英国では、日本の集落に相当するコミュニティーを、バリッシュといいますが、1970年代に、経済が低迷し、工場が撤退し、雇用の場を失い、若者たちが荒れていくという状況が起こりました。地域の経済的な低迷によるコミュニティーの崩壊に対して行政では、コミュニティー主導の考え方により、地域の人々を組織して、地域の保全活動をみずからの地域コミュニティーで行おうという施策をとりました。民主主義と地域自立、経済的な再活性化、環境と経済の両立を目指したサッチャーの施策です。ここからグラウンドワーク運動が開始されました。

イギリスのグラウンドワーク の特徴

マッチングファンド方式

徐々に自己資金を拡大し自立運営を目指しますが、この方法として、例えば、企業が資金や資材により100の拠出をし、住民も、100（ボランティア）、行政も100の拠出をするという条件を行政がつける。それぞれを合わせれば300になり各主体の拠出は少ないけれども、大きな効果を生むというパートナーシップの考え方です。

多目的の結合

福祉、労働、教育と環境という多分野の目的を結び付けて、コミュニティ内での多くの目的を同時に実現していくことでグラウンドワークの財源の確保と活動の効果を最大化する考え方です。

日本では、1991年の日英交流会議に端を発し、1995年に正式に（財）日本グラウンドワーク協会が発足しました。国内での活動としては、パンフレットに詳細に記載してありますが、滋賀県甲良町の農業基盤整備事業、宮城県鳴子町の地元資源の発掘と交流のまちづくり、鳥取県米子町の割り箸リサイクル活動、北海道十勝圏の風土景観まちづくり、福岡県内での活動、静岡県三島市の湧水のまちづくり活動などが著名です。

今後は...

- ・ 3者間のコーディネート能力をもった人材の確保
 - ・ 住民と企業の合意形成
 - ・ 住民、企業、行政のパートナーシップ形成
 - ・ 住民の積極的な参加
- といったポイントをクリアーにして、いくつかの地域にグラウンドワークトラストを設立していくことが課題とされます。

参考図書・文献

- 『パートナーシップによる環境創造
～第2回グラウンドワーク日英交流報告書』
（財）環境情報科学センター編
『地域総参加で身近な生活環境づくり～開発等対立から地域合意形成へ、日経地域情報177号』
千賀裕太郎著、日本経済新聞社
『地域再生と民主主義の学校～いい汗をかくグラウンドワーク・トラストのすすめ』
千賀裕太郎著、エコシステム9号
『よみがえれ水辺・里山・田園』千賀裕太郎著
岩波ブックレット No.364
『広げたい自助と連帯の活動』
読売新聞1995年12月18日社説
『Countryside in Trust』J.C.Dwyer, I.D.Hodge
John Wiley & Sons, Chisester

事務局日記 98年6月～7月

6月6～7日

エコライフフェア出展

環境月間に伴い、毎年屋内で行われているエコライフフェアでしたが、初めての屋外に挑戦。渋谷のNHK放送センター前の市民団体ブースで、里地ネットワークは半分以上のスペースをいただき(?)、会員10団体が出展しました。

あいにくの梅雨空であったため、「大盛況!」とまでは言えませんが、会員だけでなく、会員外のNGO団体の活動の様子などを見ることができ、訪れた方も含めて深い交流ができました。

6月8日

梅原デザイン事務所梅原真さんと対面

リクルートの地域活性事業部の方が「ぜひ会って欲しい」と言われたのがよーくわかりました。高知県大方町で砂浜美術館を地域の方と共につくっていらっしゃる方です。

美しい砂浜が美術館であり、そこでTシャツを一面に並べたTシャツアート展を行ったり、砂浜に流れ着く漂流物を飾った漂流物展、らっきょうの花見など、年間を通してイベントを行っています。

今回は、その歴史を刻んだ砂浜美術館ノート、県内のステキなところ、ちがうと思うところを写真とコラムにまとめた冊子の編集を行ったとのこと。

「私が私であることを大切にしている」と言うその力強い言葉から、新たな地域づくりの発想が出てくるのが感じられました。

6月22～23日

愛知県美浜町訪問

知多半島の南に位置する美浜町。「ふるさと研究むら模式図」を自ら描く齋藤町長は今月号の表紙を飾っていただいた里地ネットワークの幹事。温暖な気候と緑豊かなこの地域では、美しい砂浜、ため池と、天然記念物のそこに生息する川鶉等の地域資源からハウスみかんの栽培をはじめとする農業、海苔の養殖、トライアスロン大会、国際交流など積極的に活動を展開し

ています。

今回は事務局と幹事である中部リサイクル運動市民の会代表である萩原さんとともに、町内をまわり、このような地域資源を案内していただき、その後の話し合いにより、ここで地元学を実践していくようなシンポジウムの開催を決定しました。7月31日、8月1日には、地元学による地域資源調査を地元の方々とともに実践します。

6月24日

京都大学内藤教授訪問

代表幹事である内藤教授は環境地球工学という専門分野をお持ちですが、工学という面からだけでなく、化学、生物学など幅広い視点からも環境保全型技術に関してお考えになっています。今回は内藤教授の研究や捉え方、またこれからの里地ネットワークの方向性に関してなどを話し合いました。またここで、微生物を使っただけの農業に関する先進的事例を見る「発酵の旅」の計画も練られました。

6月24～25日

京都府地球デザインスクール訪問

環境保全型技術の実践地にしようと、全国の研究者達に呼びかけて開放している丹後半島に位置する府立公園予定地です。京都府企画環境部、宮津市商工観光課、各研究者達でつくる推進組織の共同運営で、「手づくりエコトピア」を目指し、地域の持っている特性を活かした様々な活動を展開しています。また、この企画に惹かれてここには多様な人が集まっていて、自分たちの研究を行っています。

現在は地元の土を使った土壁づくり、炭焼き、屋外劇場等をつくっています。

7月6～8日

熊本県水俣市訪問

地元学協会事務局長、大学の非常勤講師、水俣市役所環境課の職員という様々な顔をもつ吉本哲郎さん。5月に里地セミナーで、地元学のお話をいただき、水

侯の水をめぐる地域づくりや地域資源マップの現場を見たくて水俣市を訪問しました。「住民による水のゆくえ調査」「地域資源マップ」卓越した環境政策と水俣に生きる人々の笑顔がとても印象的でした。新しい水俣を創る活動に触れ、水俣のみなぎる力を感じました。

10月には、水をめぐる水俣の視察モニターツアーとシンポジウムの開催を計画しています。

7月13～15日

北海道標茶町訪問

今年度地域シンポジウムの開催地候補として幹事である長谷山さん、瀬田さんと共に視察に行ってきた。

た。美しい大自然の中、釧路川を境に南側は釧路湿原、北は酪農地帯である町内を役場の方に案内していただきました。

町内7ないしは8地域に分かれているこの地域は自治が発展しているところも多く、人口過疎の進んでいる地域で、公民館と保育園、小中学校を一体化させ、各施設が必要でなくなったときに住民みんなが新たな施設として活用できるようにしたり、駅の周辺を住民の手によって整備することで、JRが駅に喫茶店をつくり整備をしたり、地域全体を酪農公園にしようと各農家が敷地内を美しく整備したり...同じ町内でありながら、多様な地域づくりが見られました。また役場の方も、「住民が主体、行政はサポート」と言って、住民の主体性を重要視していました。

幹事会報告

7月28日、幹事会を開催しました。

東京セミナー報告

バイオリージョナリズム、エムシャーパーク構想、エコミュージアム、地元学、パーマカルチャー、グラウンドワークに関するセミナー報告と今後開催予定のセミナーの説明を行ないました。今後行なうセミナーは、セミナー案内の通りですが、さらに追加すべきか否かに関しては、調査事業、およびシンポジウムの進捗状況を見て別途検討することとしました。

環境保全型里地づくり調査とシンポジウム計画について

本年度日本財団の助成を得て行なう調査事業およびセミナーに関しては、以下の地域を候補案としました。実施計画の検討と、スケジュール調整などを行ないました。

北海道標茶町（農業公園構想、学校を拠点とした地域活性化、国立公園とツーリズム他）

秋田県二ツ井町（森の学校と産直住宅と林業の振興）

岩手県東山町（宮沢賢治の哲学に基づく地域振興、石と農業の商品開発の可能性の模索）

埼玉県寄居町（里山ミュージアムと自然資源調査）
長野県天竜川流域とKOA森林塾（農工林一体論と流域環境保全活動）

愛知県美浜町（地元学による地域資源マップ）

熊本県水俣市（水俣の生活者主導のまちづくりとツーリズムの実践） 他

里地憲章（ガイドライン）について

平成6年度、環境庁における里地研究会より里地に関する調査に加わっていた三井情報開発株式会社の白井信雄氏を講師に招き、里地におけるアクションプログラムに関する報告と討論を行ないました。里地憲章を作成することの意義、基本骨子、および、方向性に関する検討です。里地憲章におけるキーワードとしては、内発的里地振興、パートナーシップによる運営、地域産品の開発、地域外との交流の促進、環境保全型技術の導入、計画段階からの環境チェック、実施にあたっての環境モニタリングと実施後の環境評価等を盛り込むことを合わせて確認しました。具体的な作成計画に関しては、憲章作成のための調査プロジェクトを幹事会内部で発生させ、地域調査を行った上で来春2月を目標に作成することとしました。

里地セミナーご案内と募集

「地域はどうすれば活性化するか」

日時：9月18日（金）13:30～16:30
場所：ネスパス新潟館（東京都渋谷区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：農林水産省農業研究センター
農学博士 長谷山俊郎

むらづくりや地域おこしには、地域の人たちの活力向上が重要である。地域の人たちは、何がどう作用した時に意識が変わり、行動が生まれ、それらによって、地域はいかに活力を高めてくるか。このセミナーにおける話の内容は、事例の積み重ね（研究）にもとづいて得た、地域の人たちの活力向上過程の明確化と、地域活力向上の方策の提示にある。

その場合、大切なのが、地域の人たちの「共通目標」の有無であり、同時に「共通目標」にもとづいて活動する中で出てくる「効力感」（＝自分や自分たちが行ったことがまわりになんらかの影響を与えているという実感）を、持ち得る活動になっているかという点である。誰でも、自分たちがやっていることがまわりに注目されているという実感を持った時、元気になる。従って、そうしたものが得られる活動になるように、地域の「変化づくり」方法、内発的意欲の引き出させ方、リーダー活動の心得、組織活動のあり方、主体性の育て方、活力向上の方策、などについて、事例もまじえて話す。

「外部参入者（インハビタント）と地域活性効果について」

日時：9月19日（土）10:00～13:00
場所：ネスパス新潟館（東京都渋谷区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：鳥取県智頭町役場・
とっとり政策総合研究所センター 河原利和

本セミナーでは、中山間地域におけるコミュニティ活性化の向上に外部者の参入と関与が一つの有効な糸口を提供し得ることを、特に、熊本県小国町のケーススタディに即して実証したことを紹介する。その際、この種の外部者の重要性は単に頭数にあるのではなく、むしろそれぞれの「かけがえのなさ」や「個性・多様性」に裏付けされた地域社会への影響の質的側面に注目すべきであることを指摘した。これらの実証的な事実を踏まえて、地域コミュニティの人々とコミュニケーションを維持し、何らかの影響を与える外部参入者を「ハビタント」として一般的に概念化することを提唱した。

この定義にあてはめることにより、実証分析により確認された各々の外部参入者を「ハビタント」と、言い換えることができることを指摘した。その上で、「ハビタント」概念の明確化と分類についても検討した。さらに、「ハビタント」の参入の促進を図る上で、内部と外部の人・物・金・情報の面でのチューニング・チャンネル機構の重要性とその機能的要件についても実証的分析を行った。最後に、「ハビタント」概念が中山間地域におけるコミュニティ活力の向上等を図る上で、有効な観点を提供し得ることを明らかにした。

申込みは、別紙 『参加申込書・連絡票』をご利用ください。
開催場所の地図は、次ページにあります。

里地セミナー今後の予定

「風・水・土とモンスーンアジアの文化を見つめる」

日時：調整中
場所：ゆうど（東京都豊島区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：ユーラシアクリエイティブジャパン代表
今井俊博

「環境保全型の技術について」

日時：調整中
場所：未定
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：京都大学教授 内藤正明
日刊工業新聞 駒橋編集委員

「日本の民族文化を伝承する」

日時：調整中
場所：民族映像研究所（東京都新宿区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：民族文化映像研究所長 姫田忠義

「環境土木技術について」

日時：調整中
場所：未定
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：西日本科学研究所 代表取締役 福留脩文

9月18日、19日の会場

ネスパス新潟館 東京都渋谷区神宮前4-11-7 表参道
(地下鉄表参道駅、JR原宿駅)



イベント・募集案内

たもかく都内に「本の森」オープン

100万冊を越える古本屋さんであり、「本と森の交換」をしている福島県の「たもかく」が、8月1日(土)、池袋駅北口から徒歩1分のところにアンテナショップをオープンします。

これからは東京でも本と森の交換ができます。図書はすべて定価の半額で販売しています。

当日は割引券の配布などの特典もあります。

詳しいお問い合わせ

(株)たもかく 0241-82-2944まで

URL <http://www.NetLaputa.ne.jp/~tamokaku/>

地球デザインスクール 夏の教室特集参加者募集

6月に事務局スタッフが訪ねた地球デザインスクールからのお知らせです。

地球デザインスクールは京都府と宮津市とパートナー代表でつくる推進組織の共同運営です。8月は以下の4教室が開催されます。

森の遊具園教室

森の整備(木を伐ったり、落ち葉をかいたり)を通して森のことを考えながら遊べるしかけをつくります。今年は樹冠デッキに挑戦!

期間: 8月1日(土)~7日(金)

場所: 宮津市波見の里センター近くの実験工房

参加費: 3,000円(宿泊・食事代別)

土の建築教室(第2回)

そこにある土で建築ができないか、と思って昨年は土のテーブルをつくりました。今年は、建築物、エコハウスに挑戦。

期間: 8月4日(火)~14日(金)

場所: 宮津市波見の里センター近くの実験工房

参加費: 3,000円(宿泊・食事代別)

自然案内人&自然エネルギー教室 &風の教室現地編

エコロジカルウェブを主宰している小澤さんと自然エネルギー事業協同組合レクスタのみなさんとの共催。森を歩いたり、風を捕まえたり、海岸の漂流物ウォッチングなどを行ないます。

期間: 8月22日(土)~24日(月)

場所: 公園予定地全域

参加費: 2,000円(宿泊・食事代別)

子ども山もりキャンプ(小4~小6対象)

地球デザインスクールの楽しみは大人達だけのものではない。少年団活動をしてきた人たちを指導員とし、山海村を体験できるキャンプを企画しました。

期間: 8月22日(土)~26日(水)

場所: 宮津市波見の里センターと周辺(集合は京都駅)

参加費: 20,000円(バス・食事・キャンプ代含)

一部参加が可能なプログラムもあります。

詳しい申し込み・お問い合わせ先:

電話 075-417-3147

FAX 075-431-8376(京都)

電話&FAX 0772-28-9009

(宮津市セミナーハウス現地事務所)

URL <http://www02.so-net.ne.jp/~earth-d/>

にも詳細な情報が掲載されています。

秋田県二ツ井町

森の学校(夏の教室)募集

森の機能と役割、人との関わり、林業など体験を通じて楽しく学びながら、考えていく年4回のプログラムです。観察会や森づくり、交流会などが企画されています。

期間: 8月28~30日

場所: 秋田県二ツ井町

参加費: 12,000円

詳しい申し込み・お問い合わせ

二ツ井町役場産業振興課

電話 0185-73-4515

申込締め切り: 8月14日

N I C E

国際ワークキャンプ体験ツアー募集

事務局で修行中の原田和央は8月10～24日まで三重県大宮町で行われる国際ワークキャンプを行なっています。世界中の若者が集まって2～3週間、共同生活を行いながら環境・福祉などの地域活動に住民と共に参加するプログラムはこの夏国内で18カ所開催されます。

この国際ワークキャンプをたくさんの人に体験してもらおうと、東海・大阪地域在住の方を中心に大宮町でのワークキャンプを体験するツアーを開催します。
期間：8月22～23日

場所：三重県大宮町

内容：地域活動への参加・交流会・町内サイクリング
参加費：6,000円

詳細は事務局の原田和央まで

国際ワークキャンプ全般に関するお問い合わせは
N I C E（国際ワークキャンプ日本事務局）

電話 03-3358-7140まで

URL <http://www.jah.or.jp/~nice-do/>

他の会員のみなさんで「載せて欲しい！」という案内がありましたら、ご連絡ください。

（メールのテキストであるとしても嬉しいです）可能な限り里地通信で掲載していきます。

里地ネットワーク事務局おすすめ図書情報

『岩波講座 地球環境学』全10巻 現在、1、6、10 既刊

幹事代表の内藤教授も著者のおひとり。内藤教授は、10巻『持続可能な社会システム』を共同編集されています。ぜひ一読ください。

皆さまからの書籍、資料、ビデオ等のご紹介、ご寄付もお待ちしております。

お知らせ

ご希望の資料をお送りします。

里地セミナーやシンポジウム等の資料や記録をご希望の方は、以下のものを添えて事務局に申し出てください。できる限りの資料をまとめてご送付します。

資料請求に必要なもの

・角2封筒...お届け先住所、お名前を明記してください。切手を貼る必要はありません。

・メモ...希望する資料の内容（セミナー名、日時、講師名など）と連絡先（電話）、ご担当者名を記入してください。

・切手...手数料・郵送料として会員は1回500円、一般の方は1回1,000円を承ります。相当分の切手を同封ください。

来月号は9月上旬頃に発行します

今回の8月号は、7月8月合併号です。次号9月号は、9月上旬頃に発行します。